

2012 年度 A02 班第 1 回班会議・研究会

会場：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W205

http://lynx.let.hokudai.ac.jp/conferences/jasag2011autumn/access_map.pdf

6/30 (土)

13:00～17:30・13:00-15:00 班会議

15:15-17:30 研究会 (2名発表)

18:30-20:30 情報交換会 (懇親会)

7/1 (日)

09:00～12:30・09:00-10:00 班会議 (続き、予備)

10:15-12:30 研究会 (2名発表)

発表者①：園田浩司 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 A02 班研究協力者) 「学習における「教示の不在」ー子どもは教示をどう認識しているか (仮)」

発表者②：高橋伸幸 (北海道大学 B01 班) 「個体学習と社会学習ー概念整理と測定の試み」

発表者③：長沼正樹 (北海道大学 A01 班) 「学習行動の物質化を検討するー遠過去について実証的に研究するためにー」

発表者④：高倉純 (北海道大学 A01 班) 「動作連鎖と技量習熟・伝達の民族誌考古学」

共同研究会発表要旨

発表者①：園田 浩司 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・A02 班)

「学習における「教示の不在」ー子どもは教示をどう認識しているか (仮)」

本研究は、A02 班が研究目的のひとつにかかげる「教示行動と学習行動の関係」に焦点を当てている。交替劇プログラムが現生人類の例として取り上げるピグミー系バカやその他の狩猟採集民においては、大人による積極的な教示行動があまり見られないことが指摘されている。しかしそれは決して教示が存在しないというわけではない。

「教示を積極的に行わない」という現象を「行為がない」とみなすのではなく、会話分析という緻密な作業によって、「積極的でない」とみなされた行為の内実を解明することが、本研究の中核である。

本発表では、これまで 2012 年 3 月までに収集された、子どもを対象とする参与観察から得られた教示実態を整理し、また一方で大人が語る「子どもの頃の教示体験談」の映像を分析することで、彼らが「教示」に関してどのように知覚しているのか考察する。こうした見地から、ネアンデルタールと現生人類の両者を分かちとされる「学習能力差」、その本質を考える一助としたい。

発表者②：高橋 伸幸（北海道大学 B01 班）

「個体学習と社会学習－概念整理と測定の試み」

学習能力はほぼ全ての動物が備えており、中でもホモ・サピエンスの能力の高さは特筆すべきであるとされている。しかし、他の動物と比較して本当に何が優れているのかについては、未だに議論が続いている。

本発表では、数理生物学や数理人類学などの分野で対比されてきた2種類の学習能力である個体学習と社会学習について、心理学における知見と照合しつつ概念整理を行う。そして、ホモ・サピエンスの複数の学習能力を実際に測定し、それらの間の関係を探る実験を紹介する。

発表者③：長沼 正樹（北海道大学 A01 班）

「学習行動の物質化を検討する－遠過去について実証的に研究するために－」

遠い過去の社会について学習行動を実証的に調べるためには、学習行動の結果が物質化され、さらに考古学コンテクストで回収（発掘、資料化・報告書公表など）されていなければならない。交替劇で対象とする旧石器時代では、どういった物質化が現実存在し得る・あるいはし得ないのか、検討する。

発表者④：高倉 純（北海道大学 A01 班）

「動作連鎖と技量習熟・伝達の民族誌考古学」

要旨：技量の習熟や伝達過程に関して調査された民族誌考古学（ニューギニアやエチオピア、アラスカ等）の研究成果を紹介し、それらから得られたモデルにもとづいて考古資料の読み解きをどのようにおこなうべきかを議論する。その過程で、ルロワ＝グーランが提起した「動作連鎖」概念の意義を述べる。

以上

林 耕次

神戸学院大学 PD

A02 班研究協力者

090-1951-1621

mo.jukoe@gmail.com